

優秀賞

## 勝負事の裏で

岐阜県立恵那農業高等学校 3年 斎藤 美雨

私は幼い頃から負けず嫌いで、勝負で負けた相手に、悔しくて冷たい態度をとってしまうことがありました。

中学生の頃、私は吹奏楽部に所属していました。パート内でいつも一番をとりたくて必死に毎日練習しました。そんな時、県内中学校吹奏楽団の選抜オーディションの話がやってきます。私はそのオーディションに参加することにしました。部内では、私の他にもう一人、友達に参加しました。二人一緒に受かるなんて甘いことを言っていたりしません。つまり私たち二人は、ライバルでした。しかし、オーディションの結果は私だけ不合格。ライバルの彼女は合格し、選抜吹奏楽団に入団していきました。その事がとても悔しくて、翌日から私は彼女に対しての態度が冷たくなってしまいました。彼女を傷つけることをわかっていても、悔しさの方が勝ってしまい、なかなかそのループから抜け出すことができませんでした。

そんな時、テレビを見ると、テニスの試合が行われていました。勝負が決まると、双方が歩み寄り、握手をし、お互いのプレーを笑顔でたたえ合っていました。負けたから相手に冷たい態度をとるのではなく、その全く逆の態度を見せていたのです。その時、私はなんて小さな事で友達を傷つけてしまったのだろうと、自分が情けなくなりました。翌日、私は彼女に冷たい態度をとったことを謝り、彼女の合格を心から祝いました。

勝負事というのは、勝ち負けをきめるものですが、一方ではお互いの実力を認め合う場でもあると思います。負けてしまっても、相手の勝利をたたえ、悔しさを自分の活力に変えていくことが大切だということ。そしてお互いが気持ちよく勝負できるように努めなくてはいけないことを、中学生の自分の失敗から学ぶことができたと思います。